

氏名 杉森哲也

本論文は、日本近世の代表的な巨大都市である京都を対象に、その社会と空間の構造的  
特質について考察したものである。

まず「総論」で、京都の歴史における近世段階の位置を述べ、併せて研究史を整理した  
あと、本書の課題・方法を示す。本論部分は9つの章と2つの補論からなり、これらを三  
部に分けて構成する。

第Ⅰ部「近世京都の成立過程」では、まず1章で、京都の近世都市化の過程を、城下町  
の都市性との比較、および秀吉らの政権構想との関連から検討し、京都改造の意味を考察  
する。2章では、1586年から9年間のみ存在した関白秀次の城館＝聚楽第と、これととも  
に成立する惣町・聚楽町の構造を明らかにし、聚楽第に付随する大名屋敷街を一带のもの  
として捉えるべきことを、絵画史料なども駆使して説得的に論ずる。3章では、上京西陣  
組を素材とし、17世紀末から19世紀前半における町組の発展過程を動的かつ精緻に解  
明する。また二つの補論では京都の通りや町名を都市構造との関わりから解説する。

第Ⅱ部「町組と町代」は、近世京都の制度的骨格をなす「町一町組一惣町」の重層構造  
と、町代について取り上げる。4章は、町組と町が、中世末期から近代の学区へと継承さ  
れるまでの変容過程を都市構造との関連でたどったものである。5章は、町組運営の中核  
を担う町代が近世初頭にどのように成立したかを追ひ、惣町と町組という異なるレベルに  
おける存在を明らかにして、その本源的な性格を検討する。6章では、17世紀の上京にお  
ける町代の存在状況とその編成過程をみて、都市支配の制度的枠組みの特質を論ずる。

第Ⅲ部「都市社会の諸相」は、近世京都の都市社会を構成する諸社会集団の性格を空間  
構造との関わりの中で検討する。7章は、商家同族団としての誉田屋一統を取り上げ、近  
世後期の商人と町の関係構造を考察する。8章では、京都北西部に展開する西陣機業の存  
立構造について、織屋と下職を両極とする分業編制や住民構成の特徴を明らかにする。ま  
た9章では、1754年の西陣箴屋仲間一件（箴屋の居宅普請を大工が拒否するという差別  
事件）を取り上げ、身分的周縁論の観点から箴屋と箴搔、常大工と穢多大工の差異と差別  
構造を解明し、さらに事件の舞台となった一貫町の社会と空間の特質に迫る。

本書の主要な成果は、以下の3点である。①近世京都の制度的骨格について、町組、町  
代などの精緻な実証研究から解明し、新たな知見を多くもたらした。②なかでも、聚楽町、  
西陣組、四千貫目貸付制度、近世初期の町代などについての実証研究は、極めて重要かつ  
独創的な成果となっている。③近世後期の京都都市社会を彩る商家同族団と都市民衆世界  
の実像を、部分的ではあるが精緻に描写した。

本論文では、研究の前提に膨大な労力を注いだ史料調査と史料収集作業が伺え、これら  
が本書の独創性を担保している。また、史料分析が高度で緻密な基礎研究であること、論  
点の摘出が的確でその展開が精緻なこと、などの点で非常に高い水準に有る。本書は、Ⅰ  
・Ⅱ部とⅢ部との関係が構成上ややバランスを欠き、また全体の総括と見通しが必ずしも  
十分に述べられていない点が気になるが、本審査委員会は、上記のような顕著な成果に鑑  
みて、本論文が博士（文学）に十分値するものであるとの結論を得た。